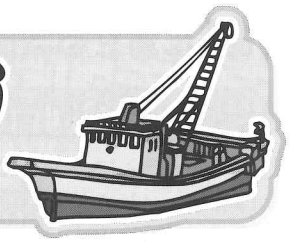
水試の何でも魚ッチング



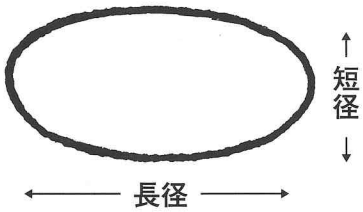
No.66『カタクチイワシ』

今回話題の主は、カタクチイワシ。ニシン目カタクチイワシ科。他のイワシの類がニシン科なのに、カタクチだけ仲間はずれ。おせち料理の"田作り"を見たから思い出したわけでもないですが・・・。市場を覗いても滅多に見られないけど、みんなが知っている魚。ああ、あれねという感じです。庄内浜でどれくらい獲れているかというと、漁協への水揚げはここ何年間もありません。身近なのに漁獲がない？何で知っているか？そう、目刺しです。シラス（時期や産地によりいろいろな魚の稚魚が入っている）干しです。タタミイワシです（あまりなじみはないか？）。

漁協の統計を10年近く見てもありません。魚種コードもありません。かなり昔、宮野浦の地曳網で漁獲したものが酒田の市場に揚がった記憶はあるんですが、さていつのことだったか？はっきりしません。刺し網の漁師さんや奥さん達は網はずしでお目にかかる機会が多いはず。"イワシを追っかけて○○が来た"のうち大部分はカタクチのはず。イワシをたらふく食べている魚は脂の乗りが違うとはよく言われることです。

ヒラメ、スズキ、サワラ、イナダ、ワラサ、クロマグロなど海の中の食物連鎖の頂点に立つような魚が好んで追っかけ回し、食べている。シラスの場合もあれば、ヒシコイワシといわれるサイズもあれば、釣りの対象になる15センチくらいのサイズまで庄内浜にもたくさん見られます。釣りは酒田港だけのようですが。

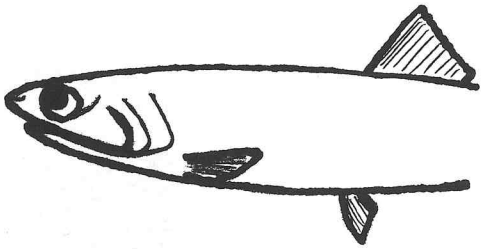
産卵場はよくわかっていませんが、4月の末から6月くらいまで山形県沖（観測定点は粟島沖）でも長径1.6ミリ、短径0.7ミリの楕円形をした卵が採集されます。魚の卵というとサメやエイ以外はほとんど球形ばかり。珍しい形の卵です。年によって数が大きく変化しますが、近年では平成16年が最も多く、次いで19年、21年という具合です。秋も春程ではありませんが少し採集されます。図鑑によれば厳冬期を除いて産卵が行われているみたいで、同じ時期でもサイズが極端に違うイワシが見受けられます。成長は2ケ月で5㎝、1年で13㎝。近年の資源動向は日本海側では増加、太平洋側では減少傾向だそうです。



カタクチイワシ卵

秋も押し詰まった頃、海岸ではスズキやイナダ、サワラが活発に餌を追いかけ回す光景が見られます。そんな時に岸辺に4～5センチのカタクチイワシが打ち上げられたりすることがよくあります、最上川河口域でもスズキが湧いた（いっぱい釣れた）時など、出羽大橋の下あたりでも見受けられます。

カタクチイワシは漢字で書くと"片口鰯"。片口とは上あごに比べて下あごが極端に短いことから名付けられたそうで、鰯は弱い魚という意味です。そのため、大きな群れをつくって行動しており、テレビの映像などで見るとすごい迫力です。アオコに食べられた瞬間うろこが飛び散るのを実際に見たことがありますが弱肉強食という言葉がぴったりでした。カタクチイワシは沿岸近くを群れて泳ぐことが多く、小型のエビやカニ、動物プランクトンのカイアシ類が主な餌だそうです。小さな体で、庄内浜だけでなく魚類の屋台骨を支え、漁業や食生活を支えてくれるカタクチイワシのパワーに　感謝！感謝！


カタクチイワシ　口が特徴的

水産試験場　松井　俊二

● 漁業経営の安定のためにぎょさいを!